

## 9 潜在的感染経路

### 牛の組織の使用についての調査に対する考察

**1052** 第7巻「医薬品と化粧品」の最後の部分で、心配されているのは単に医薬品と化粧品だけではなく、BSEが脅威をもたらした多くの産業とその作業も同様であるということについて述べた。これは、BSE感染が気づかない経路で広まったのではないことを保証するために、牛の組織を使用する全ての方法を規定する必要性のことであった。

**1053** 我々は、それがこの種の概要を作成するための最優先事項であったと考える。牛の組織を使用したすべての方法を正しく理解することは、病気が広がるのを阻止する適切な対策の立案にとって根本的なことであった。それぞれの分野において対処するために責任ある人々は連絡を受ける必要があり、リスクは査定された。関係している産業界と労働者のグループはMAFFの領域をはるかに越えて広がっていた。対策方法と全ての領域をカバーしたとの保証の調整は重要になろうとしていた。様々な種類の安全に関する法律のいくつかが配備されなければならないかもしれなかった。多くの省庁と公共団体が個別の活動の実施とモニターに関与するだろう。ひとたび対策が講じられたならば、経路の特定図は状況をモニターし、新しい情報はそれを知る必要がある人たちに伝えられたことを保証するために使われるだろう。

**1054** しかしながら、包括的概観の課題は実施されなかった。概観の必要が確認された7年後になってもまだ、知識のギャップが問題を引き起こしていた。このことはMAFFの中で、調査研究のための新たな提案に結びついた。用語「追跡監査」は、我々がここで使用した重宝な記述に適用された。

**1055** 以下のことは、何が起きたかについての短縮された記録である。より詳しい記録と分析は第7巻「医薬品と化粧品」第9章にある。

#### ティレル勧告

**1056** 1988年のサウスウッド作業部会は、牛由来の原料が何のために使用されたかを特定するための疫学的フローチャートを持っていることが有用であろうということに、ピクルス博士と共に合意した。それらはすでに識別されていた最も緊急の問題をフォローアップしたが、それら自身、全ての使用の概観を提供してはいなかった。

**1057** 問題は1年後の1989年6月に、TSEについての研究に関するティレル・レポートで拾い上げられた。これは以下の項目を含む：

「項目 A1d - 未だに確認されていないルートによって拡大する感染を引き起こす可能性のある牛(および羊)の組織とその製品の結末の調査を詳述

牛(および羊)の組織から他の種への可能性のある全てのルートが考慮に入れられ適切な対策がとられたかどうかということについて、若干の不確実性が残っている。化粧品産業のような、牛由来製品の小規模ユーザーは、現時点での規則やガイドラインではカバーされていないかもしれない。このような種類の調査、研究は正式な提案がなされておらず、このような研究が実施されるべきであるかどうかについての考察がされるべきである。\*\*\*[つまり、三つ星、最優先事項]」

**1058** 他の三つ星項目と共に、A1d は即時の行動のために大臣によって承認された。MAFF は勧告された全てのプロジェクトを二つの表に分けた。表 1 は MAFF から全額資金援助を受けた項目が含まれた；表 2 は残りの、共同で資金を供与されるか、または全て他からの資金供給を受ける項目がリストアップされた。監査と化粧品目は「未確認ルートによる感染拡大」との表題を入れられ、表 2 にリストアップされた。表現は曖昧だった：「目下重要であると考えられているルートは追跡調査されている。科学的進歩は今後の行動に対する必要性を明らかにするかもしれない。この問題は DH にとっても重要である。」

**1059** 一方、職業性の危険についてのサウスウッズの勧告をフォローアップするためのミーティングが、HSE と共に 6 月に開かれた。これには MAFF の獣医であるマッシュューズ博士も参加した。ミーティングの後、彼は MAFF の食肉衛生獣医課の上級獣医官であるハッチンス氏に、屠殺製品の行き先をリストしている背景報告書を依頼した。目的はリスクのある作業員の特定を促進することであった。ハッチンス氏は原料の副生物、加工品の副生物、およびそれらの使用について、事務的なリストを迅速に作成した。MAFF の担当官たちはこの段階で、提案されている SBO 禁止令によってカバーされる必要性のある組織がどれかを決定することに極度に没頭していた。彼らはリストの中で識別された品目の結末をそれ以上追跡することや、この件に関して興味を持っている他の省庁に連絡をとることの努力はしなかった。

**1060** 1990 年 3 月、MAFF、家畜衛生部のローレンス氏はティレル提案のそれぞれが現在どの段階にいるかについての進行表を作成した。これによって、大臣が承認した前年 8 月から、監査については何もなされていないことが明らかになった。化粧品に関しては、我々が見てきたように、DTI のロスコー氏のおかげで取り組まれていた。

**1061** この気まずい状況に直面して、ローレンス氏は MAFF の食肉取引アドバイザーのクリス・ロジャース氏に目を向け、屠殺場における原料の販路に関してアドバイスを求

めた。ローレンス氏はハッチンス氏によって作成されたリストに気づいていなかったように見える。ロジャース氏は、自身の観察を加えながら、多くの同じ品目を特定していた。これらのうちのひとつが、異なった種類の副生物に関係した。つまり屠殺とレンダリングによる廃棄物である。後に、この章でそのことに戻る。

**1062** 5月になって、MAFFの大臣であるガマー氏は、議会の討論のためにBSEについて簡潔な説明を受けている間に、監査がまだ手元に届いていないことがわかった。彼は直ちにそれにとりかかり、MAFFが資金供与を行なうよう指示した。その後、仕事のための協定を立案するのは誰の仕事であるかについて、若干の混乱と誤解が生じた。詳細は第7巻で述べる。

**1063** 結局、数カ月間にわたる休止ということになってしまった。1990年7月2日、SEACはプロジェクトがフォローアップされていないと告げられた。しかし、牛の組織が使用されるかもしれない製品の包括的状況を把握する根拠を提供するために、その組織がどこに行ったのかについて、MAFFが屠殺業者からの情報を求めている、とも聞かされた。MAFFの担当官たちは、何を要求されたのかについて偏狭な考えをしたように見受けられる。数日後、ローソン氏はMAFFの研究費を管理しているケネス・マクオーワン博士に次のように話した。「MAFFは様々な牛の組織に何が起こったのかを確立するために屠殺場における問い合わせを通して開始した。この問い合わせの結果がでるまで、資源を項目に向ける必要があるとは思えない。」

**1064** その後それは、SEACが牛由来原料の食品外製品への使用に関する論文を要求した1991年3月まで無視されていた。また、MAFFはその時に進行表の更新に着手した。ピクルス博士はDTI、MAFF、そして業界がアイテムを掌中にしているというMAFFチャート内の主張を問いただした。たまっていた埃は徹底的に吹き飛ばされ、何も行なわれていなかったことが、今、明らかになった。マスリン氏はピクルス博士に言った：

「 私たちの書類から、開始された「研究」などなかったように見えるだろう。「DTI、MAFF、産業界」を参照、というのは、私が初期にサマリーチャートに含まれているものと思い込んでいて、それが後のチャートにも引き継がれていった。アラン・ローレンスはこれが去年のBSEをめぐる議会の討論の前に、ガマー氏に対して提起されたものであったことを思い出す。しかしながら、このエリアが全く忘れ去られていたようだ。」

**1065** チャートは、DTIが業界と連絡をとっていた化粧品についてのフォローアップとより広い監査を混同していた。

**1066** こうした状況に対処する目的で、CVLのブラッドレイ氏は「思いつきで」食品以外の用途に関する提案をした。マスリン氏はピクルス博士に、これらとロジャース氏の

前年のリストがSEACから要請されている論文を形成するために併合することを勧めた。MAFFとDHの間で、誰が見過ごされているアイテムに対して責任があったかについての、熱い意見交換が続いて起こった。

**1067** すぐにローソン氏はこれが起こってはならなかったとピクルス博士に対して認めた：

「私はティレルショッピングリストの中のこの項目が、それに値する注目を集めていなかったことに満足できない、ということに全面的に同意する。」

**1068** しかしながら彼はMAFFが非難の対象になることは受け容れなかった。また、ピクルス博士がプロトコルを立案していたことを理解していたけれども：

「...それは暑い午後の長いミーティングだった。誰も記録をとらなかったので、私は結果として何も起こったようには見えないということに対して批判的過ぎることを望まなかった。我々としては、何が起こっていたかを見つけ出すことにもっと根気強く努めるべきであったということは疑いない。」

**1069** リストに関するマスリン氏の提案に応じて、ピクルス博士は意見を述べた：

「もちろん、私は「リスト」から開始することもできた。しかし調査研究の目的は、何が本当に起こったかということについてもっと公に調べることであって、我々のうちの数人が起こったかもしれないと思ったことについてはない。」

**1070** 我々はピクルス博士の意見に全面的に同意する。必要とされたものは、それらの様々な処理と加工の段階を通して製品を追跡する、完全に正確な状況であった。これはMAFFの知識の境界の外まで広く及ぼうとしていた。

**1071** いくつか付け足すことはあるけれども、実際に何が起きたかという、1989年から使用のハッチンス氏オリジナルのリストが、1991年6月28日のSEACのミーティングのためにピクルス博士によって論文に添付されたことだった。SEACは、リストが完全であるかどうか、これらの使用が一般国民や労働者にどんなリスクをもたらすかについて考察するよう依頼された。SEACは一般的にはまず問題はおきないであろうと考えたが、まだいくつかの点において懸念していた。それらのうちのひとつが染色も殺菌もされなかったSBOが、製品となって人々に接触するかもしれないという危険であった。

**1072** ローレンス氏は製薬についての規制と指導を審理する文書を作成した。それは、こういった指導や規制が状況をカバーしたとの楽観的見解をとったが、副生物の行き先については屠殺場経営者を通して一層のチェックができるように提案した。この提案は9月に文書が提出されたときもSEACによって協議されたようではなく、またフォローアップされた様子もない。調査についてのSEACの中間報告は1992年4月に公表され、牛の組織の最終的な行方に関してはMAFFによって組織内で調査されており、公式に依頼された仕事としては進展がなかった、と記されていた。

**1073** その後、この種の監査の必要性は、1995年にMAFFからの資金提供を受けたTSE研究の検討という状況下で明らかになるまで、再浮上することはなかった。提案された監査が軌道に乗り始めるまで時間がかかった。1996年2月SEACは、それは監査の遂行のための最優先事項であり、羊の組織についてもまた研究に含めるべきであると助言した。仕事は1996年6月に外部のコンサルタントから依頼され、1997年5月に完成した。

### この結果の理由

**1074** 事態はなぜこのような結末になったのか？様々な要因がそこには働いていた。MAFFは要請されたことは組織内において、既存のスタッフでできたのに、と考えた。識別された産業で働いている労働者のリスクと原料それ自体がもたらしつつづけているかもしれないリスクの関連性については、認識することができなかった。ティレルレポートが特定した研究の立場については、初めから若干の混乱があった。それは本当の研究なのか、それとも単なる事実確認の活動なのか？表2における、最初の割り当ての曖昧な表現は、状況を前に進めるための刺激を誰にも与えなかった。それ以降、連動した化粧品と監査提案の進行チャート中の圧縮された報告は、対策が進行中であるのか、誰がリードしていたのかについて、紛らわしい印象を与えた。

**1075** しかしながら、仕事をすることの重要性を考え合わせると、もしプロジェクトに推進者がいたならば、これら全ての障害は確かに克服できただろう。仕事が遂行されるよう強く求めたり、行動を実現するものは、誰一人出てこなかった。プロジェクトの所有権のこの欠如は、その運命を意味していた。

### 責任はどこにあるのか

**1076** ティレルレポートがそれを項目としてリストしたか否かに関わらず、この種の活動はBSEに関しての政府の効果的な対応に必要な前駆体であったということは疑いない。MAFFの中で、ローソン氏に率いられた家畜衛生部はBSEについての政策を立案する責任があった。政策提案を作り上げて大臣に具申し、それらが遂行されるよう調整をしていく責任は家畜衛生部の長にあった。我々はローソン氏が、適切な科学的調査

とフィールド研究からのデータによって、BSE に対する政策立案が正しく報告されることをできる限り保証する責任を負っていたとみなしている。

**1077** 用途のリストをまとめるためにハッチンス氏とロジャース氏によってなされた仕事はよいスタートではあったが、それ以上のものではなかった。彼らは製品に何が起こったか、どういうリスクがそれらに関係してくるか、ということを通して追跡しようとは努力しなかった。それでもこれらのリストは、SEAC が当面、完全な監査は時期尚早であると請合った「組織内の仕事」の総体的結果を構成しているように思われる。これはほとんど組織的な調査ではないばかりか、それが提供した手がかりをフォローアップする政策行動もない、価値のないものだった。

**1078** 我々は、概観についての仕事をなされる必要性が、そのときに明白になるべきであったと思う。牛由来の製品が使用されるかもしれない方法の全てをマップするべきか否か、またそのやり方について、科学者からの特別な助言を必要としなかったという、ローソン氏の意見に我々も同意をした。彼はそのポストについて間がなかったけれども、彼はこの問題に迅速かつ適切に対応したことを保証するべきであった。

**1079** 我々はピクルス博士がこれに対する責任を共有したかどうかについて考察した。彼女の行動を再検討すると、それぞれの段階で、彼女は監査が実行されるよう強く求めたように思われる。彼女はまた、資金の行き詰まりを打開するために DH の資金を確保しようとして努力し、独自の行動をとった。それに加えて、ガマー氏の注意をプロジェクトの実行失敗にひきつけて、仕事を進めるべきであるという彼の指示を直接引き出した。その後、彼女は MAFF において進行中であったプロトコルの作成に努力した。我々は、彼女がこれ以上のことができたであろうとは思えない。

**1080** 我々は、監査について何があったのかを調査するために骨をおった。我々は BSE の出現についての対応で、その実行の失敗を重大な欠点と考える。何度も何度も我々が調査したストーリーは、メインでは正しい対策が講じられていたことを示している。しかし、しばしば本来それができるよりももっと遅れてその行動がなされたのである。ゼラチンや広く様々な目的で使用される牛脂の安全性のようないくつかの問題が、その日にただ遅れて論議された。SBO を取り扱っている屠殺場やレンダリング工場からの廃棄物などの他の問題は、かろうじて特定されただけであった。任された仕事は、しばしば期限がなかった。草稿が推敲されている間に、緊急の警告は遅れた。もしもしっかりしたリードのもとで、全てが問題に取り組むためのフレームワークとして、認識された概観とタイムテーブルの中で働いていたとするならば、これらのいくらかが避けられることができたはずである。